

2023年4月30日 説教「汚れは我が内から」

マルコの福音書7章14-23節

この説教は、2020年6月28日に語られたものです。今日はここから学んでゆきましょう。



取税人と食事をするイエス

1. 群衆への教え (14-16節)

①聞いて悟る (14) 「**イエスは再び群衆を呼び寄せて言われた。『みな、わたしの言うことを聞いて、悟るようになりなさい。』**」イエスのガリラヤ伝道での出来事です。前段からの続きとするならガリラヤ湖の東側のどこかということになります。しかし、群衆を再び呼び寄せたとありますから、湖北部ないし北西部の可能性もあります。イエスは彼らに言われました。「わたしの言う事を聞いて悟りなさい」と。要するに、イエスの言われることの要点をしっかりととらえなさいとされているのです。旧約聖書にある律法や教えの肝腎を把握しなさいとされているのです。

②外側から入るもの (15) 「**外側から人に入って、人を汚すことのできる物は何もありません。人から出て来るものが、人を汚すのです。**」ここで、「外側から人に入る」物というのは、食べ物のことです。レビ記には、清いものと汚れたものが、区別されています。例えば、「豚、これは、ひづめが分かれており、ひづめが完全に割れたものであるが、反芻しないので、あなたがたには汚れたものである。あなたがたは、それらの肉を食べてはならない。」(レビ 11:7-8)とあります。しかし、イエスは明確に、それは人を汚すことがないと言われているのです。むしろ、人の内から出るものが人を汚すと言われるのです。イスラエル人には、その教えが斬新過ぎて理解できなかったかもしれません。

③弟子たちの質問 (17) 「**イエスが群衆から離れて、家に入られると、弟子たちは、このたとえについて尋ねた。**」そこで、群衆が離れて行った後で、弟子たちは、このたとえ話の意味について尋ねたのです。意味がわからなかったのでしょうか。あるいは、イエス様は旧約の教えを否定するのですか、と問い質しているのかもしれませんが。

2. 外側から人に入るもの (18~19節)

①あなたがたまで (18) 「**イエスは言われた。『あなたがたまで、そんなにわからないのですか。外側から人に入って来る物は人を汚すことができない、ということがわからないのですか。』**」イエスは弟子たちをたしなめて、これまで学んできたあなたがたは、まだわからないのですかと言われます。そして、外側から入って来る物は人を汚さないということを確かめるように、伝えられます。

②人の心には入らず (19) 「**そのような物は、人の心には、入らないで、**

腹に入り、そして、かわやに出されてしまうのです。」食べ物、口から入って、食道、胃、腸といった消化器官で、消化されて、外に出されてしまいます。医師が食道、胃、腸は体の外側ともいえる言われたことを聞いたことがあります。食べ物は腹腔などの体内部に入りません。それから何といても、人の心の中にも入らないのです。消化されて排泄されるだけだ、と主は言われるのです。

- ③すべての食べ物 (19)「イエスは、このように、すべての食物はきよいとされた。」「すべての食物はきよい」と、まことに大胆な発言がなされています。7章始めにおいて、律法の根本精神を見失い、枝葉末節のことで人を裁く問題が指摘されていますが、ここには食物に関する主の見方が示されています。パウロは「もし、私が神に感謝してささげて食べるなら、私が感謝する物のために、そしられるわけがあるでしょうか」(I コリント 10:30) と記しています。

3. 人の内側からでるもの (20~23 節)

- ①内側から (20~21)「また言われた。『人から出るもの、これが、人を汚すのです。内側から、すなわち、人から出て来るものは、悪い考え、不品行、盗み、殺人』外よりも、人の内から出てくるものが人を汚すという見方、思想、神学は、コペルニクスの転回と言えます。それまでは、律法によって汚れを示され、指摘されていた人間に、あなたの内から汚れが生じてくる、というのですから、驚きだったでしょう。「悪い考え」とは、ねじ曲がった見方、悪い動機、悪い企みなど、「不品行」とは姦淫よりも広い、男女関係の不正、「盗み」は物ばかりのことではありません。人のものを自分のものとしようとする心が人間に潜んでいます。「殺人」はキリストによれば兄弟に対して腹を立て、暴言を吐くことに既にその根があることが示されています (マタイ 5:22)
- ②罪のリスト (22)「姦淫、貪欲、よこしま、欺き、好色、ねたみ、そしり、高ぶり、愚かさであり、」「姦淫」は結婚した夫婦における不正です。「貪欲」は度を越えた富や名誉を求める欲、「よこしま」は品位のない行為、「欺き」は人の心を他に向けて不法を隠す、「好色」は常態を越えた性的志向、「ねたみ」は相手の成功をうらやみ、それを退けようとする思い。「そしり」は悪口、悪意のある偽りの言葉、「高ぶり」は神、人に対しての高ぶる思い、「愚かさ」は良識がなく、無鉄砲な行いです。
- ③これらの悪が (23)「これらの悪はみな、内側から出て、人を汚すのです。」これらはいわば、罪の具体的な表れですが、それらは人間の内に潜んでいるものであることが指摘されているのです。外に現われる前には見えず、内に潜んでいるのです。そして、時が満ちるとそれらは行動、行為となって現れてくるのです。内に潜んでいる状態から外に現われるまでのすべてが人を汚すのです。

《結論》日本人は汚れということに比較的敏感です。例えば、家庭において御飯茶碗というものは、親しい家族同士なのですが、それぞれが使用するものが決まっています。西洋人などのお皿には個別性がありません。御飯茶碗については、日本の観念がそのようにさせていると考えられています。

旧約の律法においては、汚れている動物、食べ物だけでなく、皮膚病 (レビ 13 章) などについて定められています。汚れたものは、清められなければなりません。しかし、食べ物の汚れたものについては、「それらの肉は食べてはならない」とあるように、食べることが禁止なのです。これに対して、イエス・キリストは「すべての食物はきよい」と言われました。それではキリストは旧約聖書の律法を意味がないと言われていのでしょうか。そうではありません。ある時代までは、それらはユダヤ人にとって、重要な戒めであったのです。律法を守ることによって、神を知り主に従ったのです。結果的には民の健康や衛生にも用いられていたのです。ところが、律法は悪用されると、人をがんじがらめにすることになってしまいました。律法の根幹にあるのは愛です。ところが、根本が見えなくなってしまうと、人をしばり喜びや感謝が消えるのです。

キリストは、汚れは外側からではなくて、人間の根源的な問題として、人間自身の中にあるとご指摘しておられます。この人間理解が明確にとらえられていないと、福音はどこまでいってもわかりません。創世記においてヨセフの兄弟たちの心の中に生じた思いは、マルコ 7 章 20~22 節に盛り込まれています。妬みや、高ぶりの思いから、彼らの中に悪い企てが生まれ、殺そうという思いにまで膨らんでいきました。ヨセフは危うく、兄弟達から殺されるどころでした。しかし、主の尊いご計画のなかに、兄のルベンやユダの思いの内に働いて、殺されることは免れます。とはいえ、私達がヨセフの兄弟たちの内に生じた妬みや殺意を、人事にとらえているうちは、イエス様の言われる汚れはわかりません。あの使徒パウロも、「私には自分のしていることがわかりません。」(ローマ 7:15) と告白して、罪に苦しみました。自らの罪に気づかなければ、今朝の聖書箇所にある主のお言葉は理屈になってしまいます。

今こそ、心を静めましょう。そして、自らのうちに潜む罪こそが主の言われる汚れなのだと思わせていただきましょう。そして、それを告白して、赦しときよめをいただいでいきましょう。「もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます」(I ヨハネ 1 章 9 節)。キリストの十字架は私たちの罪の身代わりです。この福音こそ救いです。深く覚え、主を見上げて行きましょう。